東奈良遺跡出土人物表現のある円盤形土製品について

正岡 大実

１．はじめに

ここに紹介する人物表現のある土製品は、平成14年度に行われた発掘調査で出土したものである。現在、茨木市教育委員会では既往調査で得られた各種データの再整理を進めており、当該資料もその過程で存在を新たに認識するにいたったものの一つである。本土製品については、令和３年度に遺跡発見50周年を記念した企画展示に展示するとともに報道機関に情報提供した結果、幸いにも各種メディアで取り上げられ、広く知られるところとなった。本稿は当該土製品の資料的価値の重要性を鑑み、速報的に紹介を行うことを目的としているが、当該調査の本格的な整理はほぼ未着手のままである。したがって今後、正式な報告書の刊行に向けた整理の過程で解釈が変わる可能性もあることをあらかじめ断っておく。

２．出土情報の整理

東奈良遺跡は、市域中～南部に位置する複合遺跡である。弥生時代のほぼ全時期を通じて遺構・遺物が濃密に認められ、環濠をともなう近畿地方でも屈指の拠点集落として知られている。

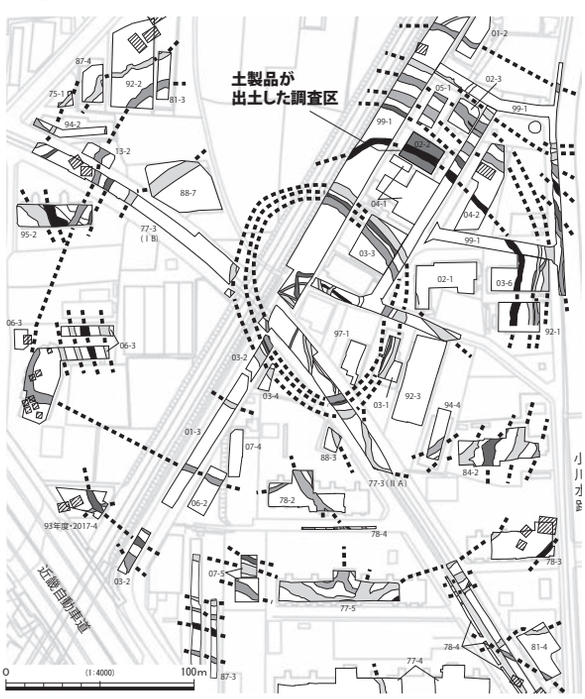

図１　土製品出土調査地点と既往の調査
（木村 2020 を一部改変して引用）

土製品が出土した地点は、東奈良遺跡の中央付近に位置しており、既往の調査から推定される弥生時代の居住域の北東部に位置している（図１）。当該調査は、共同住宅の建設事業に伴って行われた東奈良遺跡 2002-2（HN02-2）と呼称されるもので、既往の報告としては、平成14年度に概報が刊行されている（茨木市教委 2003）。

さて、本土製品を含む遺物に付属していた取り上げラベルには「HN（02-2）/R-013/ 調査区西半部 / 褐灰色粘土 / 黒褐色粘質土直上 /020708」という情報が列記されていた。遺物に認められる注記にも「HN02-2/R-013」とあることから、当該遺物は上記ラベルに付随するものとみてよい。そこで、まず上記ラベルの情報を前提として土製品の基礎的な出土情報を整理しておきたい。概報では現地表下1.45 m、標高７m付近の深度において「奈良時代頃のもの」とみられる「堅固に叩き締められた整地層」があり、その下部には「弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭の遺物を包含する黒褐色粘質土」があるとする。また、2面ある遺構面のうち、下位の第2面からは弥生時代前期後半の環濠を検出しており、第1面では弥生時代中期後半～古墳時代前期初頭の遺構・遺物を検出している。したがって、本土製品が出土した地層である「褐灰色粘土」は「整地層」を指し、当該層準は古墳時代前期初頭以前に形成された「黒褐色粘質土」の一部ないしは第1面に帰属する遺構の一部を攪拌した結果として形成された地層であること、また、土製品はその最下部の除去時に出土したものと整理することができる。

以上のように、本土製品は弥生時代中期後半～古墳時代前期初頭の遺構面を形成するいわゆる「遺物包含層」の最上部付近から出土したものであり、詳細な帰属時期は決しがたい。しかしながら、同じ単位の取り上げ遺物には、広口壺をはじめとする弥生時代中期後半の遺物が大半を占めていることに加え、後述する絵画が具象的な表現手法を採用していることや画題の内容から、当該土製品についても弥生時代中期後半の所産と考えて大過ないと判断できる。

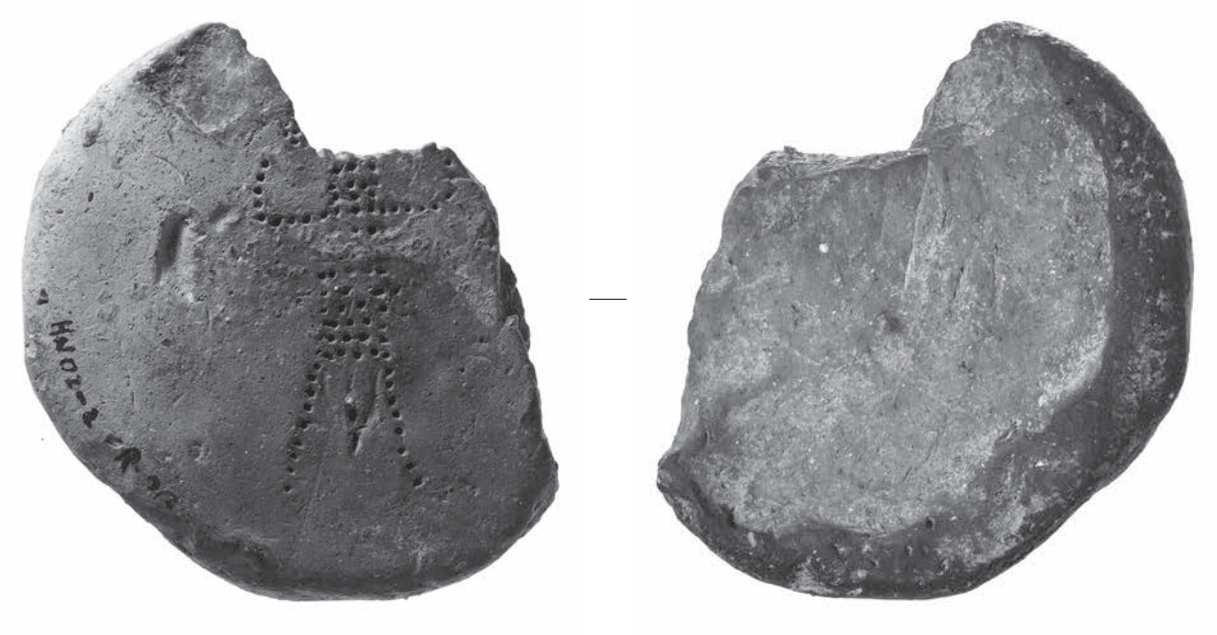

図２　土製品写真（左：中村一郎氏撮影　縮尺≒１：1）

３．土製品の概要（図２・３）

本土製品は、後述する絵画表現のある面を表面とすると、表面右側の一部を欠損しているものの、概ね直径 8.25 ㎝、厚み 1.10 ～ 1.75 ㎝の円盤形に復元可能である。焼成は良好であり、胎土は直径１㎜以内の砂礫を少量含む密なものである。肉眼観察による主観的なものではあるが、これらの特徴は概ね東奈良遺跡から出土するその他の弥生時代中期の土器と比較して違和感はない。

土製品の表面は、全面がナデによって平滑に整えられており、ナデ調整ののちに刺突と沈線の組み合わせによる絵画表現が施されている（註１）。この絵画表現は、土製品のほぼ中央に位置しており、各列点の配置から頭部（註２）・体部・腕部・脚部の各部位が明瞭に描き分けられる等の具象的な表現手法により、人物を画題としていることを一見して明らかに読み取ることができる。

一方、裏面は表面と異なり特段の調整は施されておらず、何らの意匠も施されていない。また、裏面中央部は不定な円形に凹面が形成され、縁辺部は高台状に凸面が作り出されている。凹面の遺存状態は良好である一方、凸面は均質に磨滅が進行しており、明らかに様相を異にする点は注意が必要であろう。とはいえ、磨滅の度合いから推定すると大きくは欠損していないことも窺われることから、本資料については壺等の底部が欠損したものではなく絵画表現を目的とした円盤形土製品と判断した。

４．絵画表現の検討

次に、本土製品を特徴づける絵画表現の詳細について検討を加えていきたい。

絵画表現のほぼ大部分を構成する刺突による列点は、直径 0.8 ～ 1.0 ㎜の極細の棒状工具を用いており、一部の例外を除きほぼ垂直に施されている。刺突の深さは、1.0 ～ 1.5 ㎜前後の通有のもの、3.5 ～ 4.0 ㎜の深いもの、0.5 ㎜前後と極めて浅いものの三者が認められる（図４）が、刺突の深さの違いと平面的な配置には有意な相関は認められなかった。なお、浅い刺突は極端に浅く、列点表現の一部と考えてよいか判別に惑うものも少なくない（註３）。報告者の主観も多分に含まれていることを恐れ、判断に迷うものについては、慎重を期して図上では破線で表現した（図５）。

続いて刺突の配置について検討を加えておきたい。刺突による列点は各々１㎜程度の間隔を空けた連続的な配列を基調とするが、部分的にこの配置を逸脱して近接するものや重複関係が認められるため、一定のグルーピングとその前後関係を推測することが可能である。ここでは、本画題を次の５つのグループに分けて考える。なお、横方向のものを「行」、縦方向のものを「列」と呼称する。

グループ１：脚部～腰部にかけて各１列で施され、両脚を表現するとともに体部の外郭線の役割を持つもの。グループ２の刺突に圧迫される箇所の存在からこれに先行して施されたとみられる。

グループ２：腰部～頭部にかけてグループ１の

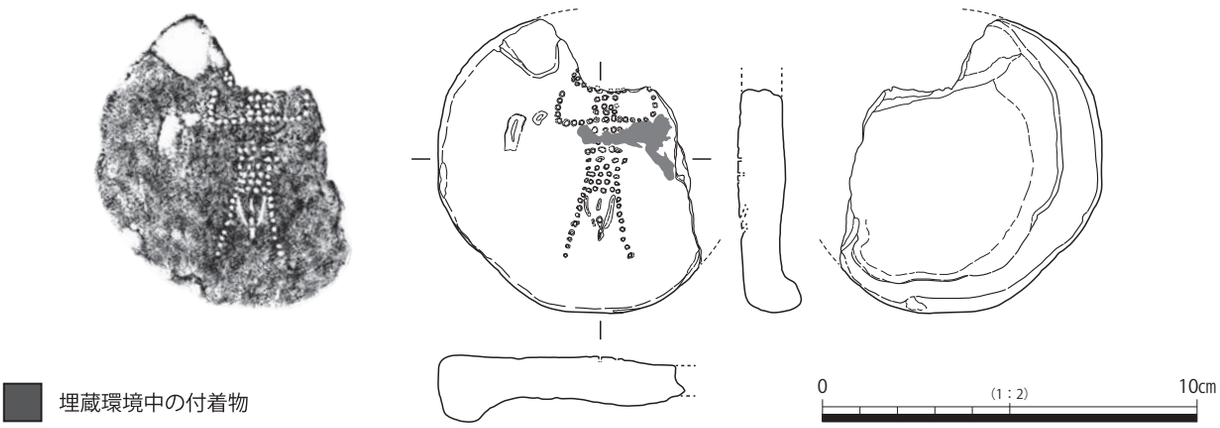

図３　土製品実測図・拓影

内部を充填するように１行あたり３列を基本に２～４列の配置で施されるもの。体部～頭部の役割を担うとみられる。グループ３の刺突に圧迫された形状を示す箇所があることから、これに先行して施されたものとみてよい。

グループ３：各１行で両腕を表現する役割をもつもの。体部から５点分外部に施された後に上方へ鋭角に屈曲して４点ないしはそれ以上施されることから、前腕部を上方に掲げた意匠とみてよい。なお、グループ２よりも僅かながら下方向に偏移して配置されることから、それぞれグループ２とは異なる一群に属するものとみた。

グループ４：頭部よりも上部に位置する表現である。大部分が欠損しているため全容を窺うことはできないが、１行３列で表現される頭部上端よりも両側に１点ずつ多く刺突が配されており、その位置関係から左上に遺存する列点と有意な関係にあることが想定できる。頭部よりも上部にあり、かつ幅広の表現であることから、何らかの飾りを模した表現とみておきたい。頭部との前後関係を検討する材料を欠くため、施されたタイミングは推測の域をでないが、位置関係から少なくともグループ２よりも後出のものとみることができる。

グループ５：腰部の直下、両脚の上半に挟まれた位置に施された２点の刺突と３線の浅い沈線からなる表現である。なお、この２点の刺突のみ明らかに下方向から斜位に刺突が施されていることから、他グループとは明瞭に描き分けがなされている点は重要である。本グループについては、位置関係から性器を表現したものとみて差支えないと考えるが、ここでは奈良県唐古・鍵遺跡第 22 次調査より出土した鳥装の人物画題にみられる木の葉状の女性器表現との類似性から女性器を表現したものと捉えておきたい（田原本町教委 2015）。ただし、最下部に位置する刺突については、性器表現の一部と考えるかどうか判断に迷う。ここでは、唐古・鍵例との比較から性器外の表現の可能性もあることを指摘するに留めておく。なお、本グループは、左側の沈線による線刻表現によって脚部の刺突が圧迫されていることから、少なくともグループ１よりも後出するものとみてよい。

５．まとめにかえて

以上、簡単ながら東奈良遺跡から出土した人物表現のある土製品について紹介を行った。本土製品に表現された「両手を挙げる人物」像は、奈良県唐古・鍵遺跡、同清水風遺跡の資料をはじめ弥生絵画のモチーフとして良く知られるものの一つである（唐古・鍵考古学ミュージアム 2020）。これら類例から本例の頭部上方にみられる表現は、清水風遺跡第２次調査の人物絵画にある羽飾りと同様のものとみても良いかもしれない。線刻表現と異なり列点表現自体が一定抽象的な表現であるため、画題細部の復元には困難がつきまとうが、いずれにせよ本土製品に表現された人物像は（鳥装の）女性のシャーマンとみることができよう。

また、本土製品の最大の特徴は、絵画表現の大

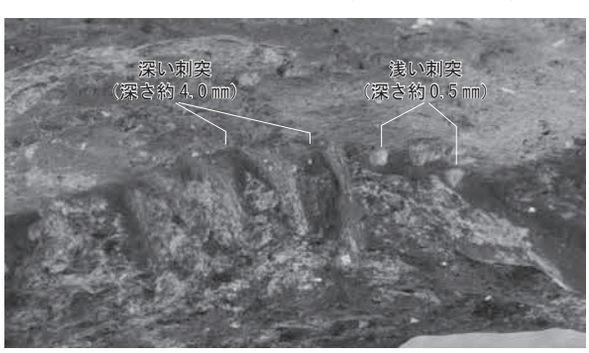

図４　断面に表出した刺突痕

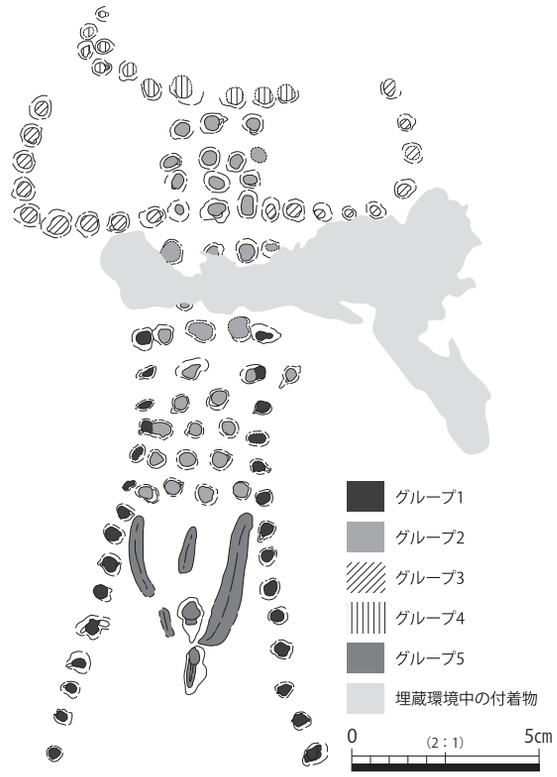

図５　絵画表現拡大写真（写真：中村一郎氏撮影　縮尺≒２：1）・拡大図

半が刺突列点によって施されることである。刺突列点は、弥生時代の絵画表現として建物や人物等の画題で副次的に用いられることはあるが、刺突そのものを描画の主要な手法とする絵画は、大阪府瓜生堂遺跡のシカ絵画例（中西 1980）等、類例としては極めて限定的である。ただし、瓜生堂例は半裁竹管状工具の連続刺突で表現されるのに対し、本例は直径１㎜以下の極細の棒状の工具によって刺突を繰り返している点が大きく異なっており、弥生絵画の表現手法の類例に貴重な事例を追加することとなった。

謝辞　本稿を作成するにあたり、以下の方々より多くの御指導・御協力を得た。記して感謝申し上げます。
辰巳和弘、中村一郎、深澤芳樹、村田幸子、森岡秀人、若林邦彦（敬称略）

註

１）本土製品表面の一部には、埋蔵環境下で付着した褐鉄鉱が絵画表現の上部を覆っている。当該付着物は、本来ノイズとして除去すべきであるが、冒頭に述べたとおり本土製品は出土から相応の時を経ているため、列点による絵画表現自体の真正性を担保する観点から、あえて当該付着物を除去することはしなかった。

２）頸部表現とみることも可能な位置関係にはあるが、欠損部に位置する列点配置のバランスを考慮し、本稿では腕部よりも上に位置する列点を頭部表現とみた。

３）本稿では明らかな凹凸を絵画として認識したが、このほかに体部中央左側の一部に器表面の色調が列点状に淡く変容する箇所がある。しかしながら、対称となる右側の露出部には同様の痕跡は認められず、器表面の磨滅が進行している箇所でもあることから、出土以後に付された痕跡の可能性を捨象しきれなかった。詳細は類例の追加や右側の大部分を覆う付着物のクリーニング等を経て慎重に判断したいと考える。

参考文献（五十音順）

茨木市教育委員会 2003「東奈良遺跡」『平成 14 年度発掘調査概報』 pp. 57-61
唐古・鍵考古学ミュージアム 2020『よみがえる弥生の祭場－唐古・鍵遺跡と清水風遺跡－』
田原本町教育委員会 2015『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ－土器編１（絵画・記号・文様）－』
中西靖人 1980「瓜生堂遺跡出土の原始絵画」『考古学雑誌』第 66 巻第１号　日本考古学会　pp. 79-83
深澤芳樹 1998「戈を持つ人」『みずほ』第 24 号　大和弥生文化の会　pp. 47-58